熊本県方言に於ける
漢語的方言語彙について

井　上　博　文

はじめに

方言語彙は、語種の観点から、和語、漢語、外来語、並びにそれらの複合したものに見分けていくことができる。この方言語彙の構成要素のうちでは、和語の語彙量が最も多いが、談話資料を整理していると、そこに漢語もまた多く見出すことができるのである。

いま、漢語出自の語と形態素として漢字を音読みしているものを含んでいる語を漢語的方言語彙[注1]と呼ぶこととする。次の文例に於いて下線を付した類である。

1．ソギャン　ホーラツ　コーチ　キタッチャ　ドギャン　シューモ　ナカ　バナ。
　（中女）そんなにたくさん買ってきても、どうしようもないよ。　→［放埒］

2．カッタル　ナワトキャ　ニャン　ゾ。ジャージカ　モンダイケ。（老女）
　しっかりしまっておけよ。大事なものだから。　→［大事カ］

3．ゾーミズ　ノモゴタットダロ。オメーク。（老男）
　（牛は）雑水を飲みたいのだろう。ないている。　→［雑水］

4．オキョサン　アギュイ。（中女）　お経をあげよう。　→［お経さん］

漢語研究は国語史研究の中で重要な位置を占めており、現在、語彙史研究の盛況とともに、その意味・用法の討究がなされつつある。生活語の中に息づく漢語研究の重要性は、夙に、藤原与一先生によって、「民間漢語」として指摘がなされている。

方言に於ける漢語語彙の研究としては、例えば、瀬戸内海域方言の副詞語彙に属する漢語副詞の整理[注2]や、中国方言の性向語彙の地域性の特徴の一つとして、山陰方言に漢語出自の語彙が栄えている事実などの指摘がある[注3]。

本稿は、熊本県方言に所属する一地点方言である砥用町方言を取り上げて、そこに息づく漢語的方言語彙の生態を明らかにしようとするものである。このことは、方言語彙研究に新たな一視点を提示することとともに、①漢語的方言語彙の実態の解明（形態的特徴、語構成、意味・用法、語彙分野・意味分野での役割、語彙量）、②九州方言語彙の特色を明らかにする、③漢語の方言語化の様相の解明といった問題へ広がっていくと思われる。

さて、漢語的方言語彙をいかにして採取するのかという切実な問題がある。漢語的方言語彙の採取方法としては、A.生活語彙の中から漢語的方言語彙を広く採取する方法。B.特定の語彙分野、意味分野を取り上げて、その分野の語を尽くす方法が考えられる。実際にはこの二つの方法が相俟って行われるべきである。しかし、一地点方言に於いていかなる語が存し、どういった生態を示しているか十分に明らかでない現在、Bの方法を中心とすることが有効であると思われる。

用いた資料は、熊本県下益城郡砥用町での実地調査（昭和55年8月～63年9月）で得た

ものである。その中から漢語的方言語彙を抽出し、方言語彙として重要であると思われる語については、意味・用法に関して再調査を行った。なお、調査は50歳以上の男女を対象としている。

一. 品　詞

まず、得られた漢語的方言語彙を品詞によって見分けてみる。ここには、名詞、(助数詞)、代名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞を挙げることができる。一例ずつ示せば、以下のようである。

5．カーキモ　コトシャ　アマガ　モ　ジュクシナッテ　シマーウ。(老男)
　柿も今年は甘(柿)がもう熟柿になってしまう。

6．モー　ドチャン　シテン　タンベツノ　モクジバ　ヘラチクッタ　ショーワナカ　タイ。ゴタングリャカン　シレン。(中男)　もうどっちにしても反別の目次を減らしてくるのはしょうがないよ。五反ぐらいかもしれない。

7．オラ　イカンホーガ　ヨカテ　オモトルバッテンガ　ジブンナ　ドギャ　ヤ。
　(中男)おれはいかない方がいいと思っているが、君はどうだい。

8．チートン　コテ　ギャ　アクタワンデ　ヨカロ　モネ。(老男)
　少しのことにこんなに悪口を言わないでもいいじゃないか。

9．コン　ウシャー　ソーニャ　ダクシテカラン　ヨカ　ウシ　バナ。(中男)
　この牛はたいへんおとなしくていい牛ですよ。

10．ムンナ　コツ　スットシャギャニャ　エダン　ツンオッルッ。(老女)
　無理なことをすると、腕が折れる。

11．シャーシャ　キテ　ハニャチ　イカス　バナ。トーシンコッ　タイ。(老女)
　いつも来て話していかれるよ。いつものことだよ。

このうち、名詞が他の品詞に比して最も多くの語を見せ、次にカ語尾の形容詞、副詞が得られている。代名詞としては、対称のジブン［自分］一語のみである。

二. 語構成

さて、漢語的方言語彙を、その語構成に注目してみると、漢(字)語を方言語彙として受容する方法上の工夫をうかがい知ることができる。大きくは、漢語単独のものと他の形態素と複合しているものとの二種に見分けることができる。

(1)漢語単独のものの例をいくつか示すと、ジェッタイ・ゼッタイ［絶対］、サンダン［算段］、サンニョ［算用］<計算>、ジンブツ［人物］、ミャース［売僧］<お世辞>などである。

(2)他の形態素と複合しているものは、複合している形態素が何であるかによって細分される。①和語と複合しているものとしては、例えば、

シューギイッャ［祝儀祝い］<結婚祝い>、ソーレマイッ［葬礼参り］、ユービンモチ［郵便持ち］<郵便配達人>、イッケウチ［一家うち］<親類>、チャジョケ［茶塩気］<茶うけ>、ダゴジュル［団子汁］、ジェンツキャー［銭使い］<浪費家>、カジャクシ［貝杓子］<汁をつぐ杓子>、イネジノ［稲収納］、ムギジノ［麦収納］、ミュートゲンカ［夫婦喧嘩］、ヤンボシ［山法師］<ぼさぼさの頭>

これらの語は、和語が先にきているものと後にきているものとがある。

また、②接辞の付いたものがある。接辞の出自によって見分けてみる。まず、和語出自の接辞の付いたものを挙げると、次のようなものがある。

(a)ニンゲンヨシ［人間よし］＜愚かな人＞、(b)タイショズキ［大将好き］＜何でも先頭に立ちたがる人＞、(c)シンケイモチ［神経持ち］＜神経質な人＞、(d)アンジャシトー［兄者人］＜兄＞、(e)アンジャモン［兄者者］＜兄＞、ヤッキャーモン［厄介者］、ヨーリョーモン［要領者］＜要領のいい人＞、(f)クッシヤ［菓子屋］、(g)バクリョドン［馬喰殿］、イシャドン［医者殿］、ジャージンドン［大尽殿］＜金持ち＞、ヒョーキンドン［剽軽殿］、(h)セーショコサン［清正公様］、テンジンサン［天神様］、ドーサン［堂様］＜集落内のお堂＞、(i)ヒョーキンタン［剽軽タン］、バカタン［馬鹿タン］、アホタン［阿呆タン］

ここに、接尾辞として、「ヨシ・ズキ・モチ・シト・モン・ヤ・ドン・サン・タン」が見られる。ついで、漢語出自の接辞の付いたものを挙げると、「シャ・ニン」の下接した次の語がある。(a)クロシャ［苦労者］、ヒョーゲシャ［剽軽者］、(b)シンボニン［辛抱人］＜倹約家＞である。

接頭辞としては、オキョサン［お経さん］＜お経＞のように、「オ」が見られる。

以上、見てきたように、方言語彙の世界は接辞の活躍する世界でもある。その働きによって漢語が違和感なく生活語として受容され、かつ漢語を基にした新たな造語がなされている。

次には、九州方言、特に九州西部域の一特徴として知られるカ語尾による形容詞にも有力な造語力が認められる。いくつかの語を挙げてみる。

オドカ［横道カ］、シンセツカ［親切カ］、コーシャカ［巧者カ］ジャージカ［大事カ］、キユカ［器用カ］、タイセツカ［大切カ］、ショージカ［正直カ］、キャシャカ［華奢カ］、ジョーブンカ［丈夫カ］、オーチャカ［横着カ］、ジョーヒンカ［上品カ］、ナンギカ［難儀カ］、カッテカ［勝手カ］、ホーラツカ［放埒カ］、ジミカ［地味カ］、ジェータッカ［贅沢カ］、ムゾカ［無慙カ］、オクビョカ［臆病カ］、フジュユカ［不自由カ］、フユカ［不用カ］、ザンネンカ［残念カ］、ネッシンカ［熱心カ］、ケッコーカ［結構カ］、ウーバンギャカ［大番外カ］、オヨカ［鷹揚カ］、ブチホカ［無調法カ］、ダクカ［楽カ］

このように、「～カ」によって多くの漢語が形容詞として用いられている。

また一方で、カ語尾の形容詞に比べると、語数は少ないものの、ナ語尾による漢語形容動詞がある。ウサンナ［胡散ナ］、ケッコーナ［結構ナ］、ダメナ［駄目ナ］、ムンナ［無理ナ］、ドクナ［禄ナ］といった語である。これにまた「～カ」が下接し、ユージンナカ［用心ナカ］、トゼンナカ［徒然ナカ］、チャーヘンナカ［大変ナカ］といった語さえも造り出している。

連語として、「～ノヨカ（の良い）」「～ノワルカ（の悪い）」のように用いられるものがある。例えば、キゼンノヨカ・ワルカ［毅然ノヨカ・ワルカ］＜しっかりしている＞、ムシャンヨカ・ワルカ［武者ンヨカ・ワルカ］＜かっこいい＞、キショクンヨカ・ワルカ［気色ノヨカ］＜気持が良い＞などである。

以上のように、様々な方法を巧みに用いて、漢（字）語を受容している。方言の語彙になんらかの、新たな語を必要とする事態が生まれたことに即して、漢（字）語を利用し、みずからの語彙生活を豊かなものにしていったことが考えられる。

三．意味・用法

語が一たび、方言世界に取り込まれると、そこに微妙なニュアンスが生じることになる。方言語彙としてのひとつの真面目は、意味・用法の変化にあると思われる[注4]。以下には、意味・用法の観点から漢語的方言語彙を見てみることにする。無論、語義的意義特徴においては、共通語と異なることのない語が普通である。近年、新しく取り込まれたものは、特にそうである。その一方で、共通語とは、意味・用法を異にしている語を数多く見出すことができる。また、喚情的意義特徴では、種々の異なりを見せている。

まず、ヒョーロは、将兵の糧食や武家の食糧にあてる米といった意味を持つ、「兵糧」を出自としていると思われる。共通語では、文章語としてあり、口頭語としては用いられていない。当該方言では、次の文例のように、家畜やペットの餌の意味であり、その主体が、すでに人間ではなくなっている[注5]。

12. ウシン　ヒョーロワ　アッタ　カイ。ナカレバ　キッテ　キトケ。（老男）
　牛の餌はあったかい。無いのなら［草を］刈ってきておけ。

13. ネコニャ　ヒョーロバ　クッセトキャ　ニャン　ゾ。（中女）
　猫には餌を食わせておかないといけないよ。

ここに、主体が人間から家畜やペットへという移行が認められる。これは意味の下落といってよいものであろう。

ボンノは、仏教語として、心や身を惑わし悩ませる心の働きを言い表す「煩悩」を出自とする。

14. ワレ　ボンノン　アルケン　ゴギャ　オゴット　ゾ。（中女）
　お前に愛情があるからこんなに叱るのだよ。

15. ボンノ　カケガチャモ　ナーン　ナカ　ヨ。（中女）
　愛情のかけがいもなにもないよ。

というように、愛情の意味で用いられる。多くは親から子どもへの愛情である。とすれば、共通語の煩悩に比べるとき、その意味がプラスの方向へと変化していると考えられる。

先に、語構成のところで、カ語尾による造語を示した。そこには、名詞から形容詞へと品詞が変化したものが指摘されるが、品詞の変化という文法的な変化とともに、語義も変化した語がある。たとえば「放埒」は、ホーラツカの語形で形容詞として、またホーラツの語形で副詞として、次の文例のように数量のおびただしいことを言い表す。

16. カキノ　ホーラツ　ナッテカル　メイワク　シトッ　タイ。（中女）
　柿がたくさん生ってるので迷惑しているよ。

このホーラツは、多過ぎてかえって迷惑するというようなニュアンスを持っている。人の放縦な行いや性格を意味する「放埒」を出自としている。語義自体は変化しているものの、喚情的特徴が、出自となった漢語のそれと、共通している点が興味深い。

また、共通語と同じ用法を持ちながら、加えて方言独自の用法を獲得している語がある。

タイセツは、連用修飾部に立って、

17. モナー　タイセチ　セニャン　バチカブッ。（老女）

物は大切にしないと、罰があたる。

という使い方と同時に、次のように、＜あら、大変だ＞といったような話者の詠嘆・感嘆を表す用法がある。

18. ジャージ　バイ。イシャドンデン　イカヤンゴツ　キャーナッタラ　タイセツ。

（老女）大変だよ。医者にでも行くようになったら大変だ。

肥筑方言にあっては、「～コツ」やサ詠嘆法のように体言相当の言いかたで文を終止することによって、話者の詠嘆・感嘆を表す表現法がある。この事実と相通じるものであろう。ジャージ［大事］もまたタイセツと同じ用法を持っている。

「無慙」を基に、形容詞のムゾカ＜かわいい・かわいそう＞、ムゾラシカ＜かわいらしい＞、形容動詞のムゾナゲ＜かわいそう＞、動詞のムゾガル＜かわいがる＞の4語が派生している。

19. ドーダロ　カ。コン　コン　ムゾラシカ　コーツ。（中女）

なんとまあ、この子のかわいらしいこと！

20. ムゾカバッテン　ジブンデ　シデカチャ　コツダイケン　ションナカ　タイ。

（老女）かわいそうだけれども自分でしでかしたことだからしようがないよ。

21. アンマ　ムゾガットシャギャニャ　コヤツガ　ショノム。（老女）

あんまり［一方の犬を］かわいがるとこいつがうらやましがる。

このうち、ムゾカは、＜かわいい＞と＜かわいそう＞の二つの意味を持つが、＜かわいい＞の意味ではムゾラシカを専ら用いるようである。出自の「無慙」は、『日葡辞書』に見え、「下」の注記がある。

> Muzô. ムザウ［無慙］　誰か人に対して、憐れみと同情の心を抱いていることを表わすのに用いる語．下［X.］の語．（『邦訳日葡辞書』437頁）

「不用」は、『日葡辞書』に次のようにある。

> Fuyô. フヨウ［不用］　怠惰・無精．Fuyôuo camayuru.（不用を構ゆる）怠け心を抱く．（『邦訳日葡辞書』289頁）

名詞のフユジ［不用人］＜怠け者・寒がり＞となり、人の性向を表し、形容詞のフユカ［不用カ］ともなっている。

22. フユジダイケ　コタツバッカリ　オッ。デチ　アゾベ。（老女）

寒がりだから炬燵ばかりにいる。（外に）でて遊べ。

以下には、方言語彙として、重要であると思われる語と、その文例を挙げることにする。冒頭に［　］で出自となったと思われる漢語を示す。

① ［雑談］アンワリャ　ゾータンバカッ　ユーチ　ワラワセラス。オモシレー　ワッ。

（中女）あの人は冗談ばかり言って（人を）笑わせられる。面白い人だ。

② ［愛想・会釈］アイソエシャクノ　ヨカ　ワリャ　アギャーン　オラレン　ヨ。（中女）

愛想のよい人はあんなにおられないよ。

③ ［騒動］ソードン　スットン　ヒドカゴタッ。（中女）あばれるのがひどいようだ。

④ ［趣向］アサハヨカッ　ソギャン　ヨカ　シコシテ　ドコサン　イクト　カイ。（中男）

朝早くからそんなにいい恰好してからどこにいくのかい。

ショーガツノ　シコ　シトカニャンケ　イソガシカ。（中女）
正月の準備をしておかなければならないから忙しい。

⑤［啖呵］ツーリャ　カナワンジ　オッテ　タンカ　キンナ。（中男）事情は分からないで大きなことを言うな。

⑥［一門］ワッガ　イチモンワ　ナンチュー　フー　カイ。（中男）
おまえの親戚は何という状態か。

⑦［題目］ジャーモクバッカデ　ヨリアイシテカラン　キメラシタゲニャ　タイ。（老女）
中心になる人ばかりで寄合いをして決められたそうだよ。

⑧［一生］カライッシュ　ミテクンナラ　ヨカバッテン。（中女）
一生［面倒を］みてくれるならよいけれど。

⑨［合食］オラ　アヤットニャ　ガッショクダイケン　ワル　イテ　ハニャチ　クレ。ソーニャ　ナカン　ワルカ。キノ　アワン　コツ。（中男）おれはあいつとは仲が悪いから、おまえ言って話してくれ。とても仲が悪い。気が合わないこと。

⑩［器用］キユカケ　ナンデン　ツクッテ　シマワス　タイ。（中女）
器用だから何でも作ってしまわれる。

⑪［華奢］コギャーン　キャシャカッデ　シタッチャ　スグ　ツンオルッ　ゾ。（中男）
こんなひよわなものでしてもすぐ折れるぞ。

⑫［大番外］ウーバンギャナ　コツバカ　イワス。（中女）途方もないことばかり言う。

⑬［容体］ジブンドンデ　クラシモ　タタン　ヨージャナ　ヤッドン。（老女）
自分たちで暮しもたたないみっともないやつらだ。

⑭［小癪］イットキャ　ダマットリャ　エーコテ　コシャクナ　コツバカ　ユー。（中男）
すこし黙っていればいいのに、生意気なことばかり言う。

⑮［胡散］アン　ワンノ　ウサーンナ　フーシテ　ミチベチャ　スワットライタ。（中女）
あいつがみっともない恰好をして道端に坐っていた。

⑯［武者］エラーイ　ムシャンヨカツバ　モットン　ナイ。（老男）
とてもかっこいいのを持っているね。

⑰［神変］ジンベン　ゲガセンダッタ　ナイ。カンキッノ　アルケン　ユージン　セニャン。（老女）よくもまあ怪我しなかったね。竹の切り株があるから用心しないと。

⑱［自然］ケガ　シタッチャ　スーグ　ジネント　ヨーナッ　ヨ。（中女）
けがをしてもすぐに自然によくなるよ。

⑲［初手］ショーテカル　シオッタゴーツ　シオル。マチギャワ　ナカ。（老男）
昔からしていたようにしている。間違いはない。

ここには、共通語には認められない語、共通語と意味・用法のずれがある語、方言が古い意味・用法を残存させていると思われる語など、複雑な様相を呈している。漢語的方言語彙の意味・用法を整理、分類しようとするとき、その難しさを思う。一つ一つの語にそれぞれの歴史と個性があるからである。詳細な分析結果に基づく分類は今後の課題として、いまは語を示すに止めておくことにする。

四. 意味分野

以上、語に即して、意味・用法を見てみた。しかし、一語一語は個別にあるのではなく、緩急の差はあるものの、他の語との関係の中に位置づけられているものである。

ここでは、餌語彙、身体語彙、数量関係の副詞語彙[注6]の三つを取り上げて、意味分野の中の漢語的方言語彙を見てみる[注7]。和語を中心とする語彙体系の中に漢語的方言語彙がどのように組み込まれているのであろうか。

(1) 餌 語 彙

これはエサ、メシ、ヒョーロ、ハミの四語からなる小さな分野である。牛や馬の餌については動詞ハム(食む)の連用形転成名詞のハミが用いられる。ヒョーロは牛馬に対しても用いることができ、さらには鶏や犬、猫などの餌にも使用できる。ハミよりも対象とする領域が広い。しかし、人間については用いることがなく、そこにはメシがある。このメシは動物全体に用いることができる。エサは小鳥や魚釣りの際の餌として用いることがふつうである。こういった中に、ヒョーロは位置している。

(2) 身体語彙

身体語彙はいわゆる基礎語彙とされるものである。当該方言の身体語彙に認められる漢語的方言語彙は、ズーチャ［図体］、ズ［頭］、ボンノクド［盆の窪］、ド（ー）［胴］、ゴチャ［五体］、ヒジンボ（ー）ズ・ヒジボズ［ひじ(の)坊主］、テノコー［手の甲］、カンセツ［関節］、ヒザンボ（ー）ズ・ヒザボズ［膝（の）坊主］、アドボ（ー）ズ［あど坊主］の13語である。カンセツは新しい語であろう。ボ（ー）ズを形態素として後部要素に持つ一群やボンノクド、テノコーは身体部位のうち細かな部分を指し示している。

身体全体を言い表すものには、カラダとズーチャがある。ズーチャは、「ズーチャバッカフトナッテ（身体ばかり大きくなって)」というように、その大きさが問題にされることが普通である。カラダは「カラダバ　ユージン　セニャン（身体を大切にしなければ)」の言い方が可能のように、健康の側面も包含している。

背中を表すゴチャはセナカ（シェナカ）に押されつつある。

頭を表す語としては、ズ、アタマ、ゴ（ー）ラ[注8]の三語がある。アタマが普通に用いられる語であり、ズとゴ（ー）ラは使用頻度が低い。意味の上から見ると、ズは「ズー　カマスッ（頭突きをする)」や「ズン　カタカ・ヤワカ（頭が堅い・柔らかい）という言い方の中で用いられ、表面の堅さに注目している。一方、ゴ（ー）ラは「ゴ（ー）ラン　ヨカ・ワルカ（頭が良い・悪い)」と言うように、頭の働きに重点がある。髪を刈りにくいことを言い表す、「アタマバ　ツミ　イク」という表現は、ズやゴ（ー）ラとは置換できない。アタマに比べると、この二語は限定的な使われ方を示す。

身体のうち、首と手足とを除いた部分を言うドーは、ハラ、ヨコバラ、ムネなどを含む部分の総称となっている。このドーに対応する和語は見出せない。

メやハナなど身体の細かな部位を指し示すものは、そのほとんどが和語であり、わずかに漢語的方言語彙が見られた。総称的なものに漢語的方言語彙が存したが、そこには、ドーを除いて和語が併存しており、両者の間には何らかの違いが見られた。身体語彙の中に

あって、漢語的方言語彙は、いわば脇役の位置にある。

(3) 数量関係の副詞語彙

語の相互が包摂・被包摂といった緊密な関わりではなく、比較的緩やかに結び付いている意味分野として、数量関係の副詞語彙を見てみる。当該方言では、168語の数量関係の副詞語彙を得ている。そのうち漢語的方言語彙は、以下に示した35語（括弧の数字は、漢語的方言語彙の語数／数量関係の副詞語彙の語数）である。

①〈数量の全〉(5/38) ジェンブ（ゼンブ）[全部]・ソーヨ [総容・総様]・イッツ [一双・一統]・ヤザイガッサイ [家財合財]

②〈数量の多〉(21/84) タイギャニャ（タイギャー・タイヤー）[大概]・ズイブン [随分]・ソートー [相当]・イッピャ（イッパイ・ホイッピャ・ハライッピャ・イッピャコッピャ）[一杯]・ホーラツ [放埒]・ヨケー（ヨケイニ）[余計]・タクサン [沢山]・タイソー [大層]・アクシャウツゴテ [悪態]・キショクンワルナルゴテ [気色]・ジャーブン（ダイブン）[大分]・ダイタイ [大体]・タイガイ [大概][注9]

③〈数量の適当〉(1/7) チョード [丁度]

④〈数量の少〉(2/23) ショーショ [少々]・タショー [多少]

⑤〈数量の無〉(6/16) ジェンジェン（ゼンゼン）[全然]・ダーイタイ [大体]・イッチョン [一丁]（イッチョモ・イッチョデン）

数量程度の程度性によって分節した意味分野ごとに、漢語的方言語彙の比率に差異が認められる。〈数量の全〉13.2%、〈数量の多〉25.0%、〈数量の適当〉14.3%、〈数量の少〉8.7%、〈数量の無〉37.5%であり、〈数量の多〉〈数量の無〉の比率が高く、〈数量の全〉〈数量の適当〉〈数量の少〉が相対的に低くなっている。

〈数量の少〉を見ると、チット・チビット・チョボットなどのオノマトペの語が大半を占めている。漢語的方言語彙のショーショ・タショーの二語の使用頻度は低く、教示者には「共通語」との意識があり、やや改った感じを伴っている。特定のあらたまった場面の為に用意された語であろう。

それに対して、ジェンブ・タイギャニャ・イッピャ・ホーラツ・ジャーブン・ジェンジェン・イッチョン（イッチョデン）などは、使用頻度も高く、基本語となっている。つまり、同一の意味分野の中の漢語的方言語彙といっても、浸透の度合いに大きな違いがある。

おわりに——今後の課題——

以上、語種の観点から漢語的方言語彙というひとつのまとまりを措定し、そこに所属するいくらかの語を示し、今後の研究の視点をいくつか考えてきた。しかし、文献国語史との関わり、年層差、地域性の解明など討究しなければならない問題が山積みされている。最後に地域性の一端について触れておく。

熊本県方言に属する砥用町方言で得られた語彙を中心に述べてきたが、視野を広げると、そこには地域性が指摘される。例えば、＜怠け者・寒がり＞を表すフユジを『全国方言辞典』で見ると、「不用」を基にした、

ふゆーじ　なまけ者。無精者。熊本。ふゆーなし　長崎県平戸。ふゆぼー　佐賀。ふ

ゆじん　南島八重山。／ふゆーか［形］→ふゆごろ　大儀な。不精な。佐賀・熊本。
ふゆーな　筑後久留米［はまおき］・大分・鹿児島。／ふよー　怠惰。「フヨーな人」「フヨーする」山口。ふゆ　鹿児島。／ふよごろ　→ふよー　怠け者。香川県小豆島。
ふよーもん　山口県笠戸島。／ふよーたろー　寒がり者。山口。

のようにいくつかの語を見出すことができる。九州地方を中心に山口県、香川県といった瀬戸内海域にも関連する語が分布している。そこには、造語の有様に地域性が認められる。

またボンノは、『鹿児島県方言辞典』にも「愛情。おもいやり。かわいげ。(中略)(薩)(隅)」とあり、鹿児島県下でも熊本県方言と同様な意味で用いられていることを知り得る。

ホーラツ・ホーラツカは、『全国方言辞典』によれば、大分県日田郡で「ほーらつい」とイ語尾の形容詞で「おびただしい。とんでもない」といった熊本県方言と同じ意味を持っているが、『佐賀の方言』によれば、「アイガ　ゴト　ホーラツカター　オランバン。使ワリャー　セン」というように、佐賀県方言では、人の放縦な性向を表している[注10]。つまり佐賀県方言が『日葡辞書』に見られる「放埒」の意味を残している。同一の漢語を出自とするものの、意味の地域性が存するのである[注11]。

同様に意味の地域性を示す語に、「五体」を出自とするゴチャがある。『全国方言辞典』には、「ごたい　①身体。広島・山口・香川・高知・福岡・長崎。　②背中。佐賀。　③胴。熊本県玉名郡　④脚。仙台（浜萩）・宮城県登米郡・山形県米沢」のように身体、背中、胴、脚の四つの意味が挙げられている[注12]。地域によって表す身体の部位を異にしている状況を知ることができる。

このように、同一の漢語を出自としていても、音変化や複合、派生などによって語形を異にしたり、意味・用法の上に相違があって、そこに興味深い地域性が生じている。

学校教育、新聞など、そこには溢れるばかりの漢語がある。しかし、日常口頭語としての方言の世界に浸透している漢語的方言語彙は、決して無制限、無秩序なものではなさそうである。一地点方言でも、語彙分野・意味分野ごとに、種々の事情を異にしている。体系を異にする方言間に於いても、それぞれの情況によって趣きに違いがあろう。そこには、関心の強弱、生活の必要性の度合いの高低といえば大ぐくり過ぎようが、そうとも表現すべき力の存在の関与が想定される。

注

(注1) 大橋勝男「国語の生きさま（その六）―新潟県下の漢語的方言語彙について―」(1982『新大国語』第8号）に於ける大橋先生の術語をお借りした。その中で「方言語彙として地方言語生活の中に生息している、ないしは生息してきた漢語出自のもの、または、漢字語的なものを指す」と定義されている。

(注2) 佐々木峻「瀬戸内海域島嶼方言に見る漢語副詞―小豆島・神島・因島・大島・能美島・長島―(1976　『内海文化研究紀要第4号　瀬戸内海域方言の副詞語彙の研究』)

(注3) 室山敏昭『中国地方方言の性向語彙研究序説』(1979　広島大学文学部研究紀要特輯号1　64頁)

(注4) 語が一旦、方言の中に取り込まれると、当該方言の音韻体系に即して音変化を被ることが普通である。そこには、母音の交替、連母音の同化、子音の変化、長音の短呼、撥音の脱落、促音化、口蓋化、連声などがある。また古態音とされる合拗音も

見られる。音変化を経ることで、いわゆる漢語の音の堅さがとれ、そうして生活語として自然な、違和感のないものとなると考えられる。そして、語形が変化することで意味・用法の変化も促進されていく。このことは、無論、漢語的方言語彙に限ることではない。

(注5) 岡野信子先生のご教示によれば、山口県下では「自家米」の意あるという。また、『日本言語地図』170「はんまい(飯米)」によると、HYOOROO が大分県下を中心に熊本県南部と福岡県に点在している。

(注6) 拙稿「熊本県下益城郡砥用町方言の程度副詞語彙の構造—数量関係の副詞語彙を中心にして—」(1987 『国文学攷』第113号) 参照

(注7) 注1論文に於いて、漢語的方言語彙を生活分野ごとに整理し、抽象的世界と物の名称の世界に顕著に見出されるとの指摘がある。

(注8) 熊本県八代市方言では、「ゴラ」は「アタマ」に対して「俗語的表現」であり、「広くは首から上、狭くは顔の上の、髪の生えている部分」であるという。
(平山輝男編『全国方言辞典② 県別人体語彙の体系』 熊本県八代市方言 糸井寛一氏記述)

(注9) タイギャーとタイガイとは、同じく漢語「大概」を出自としている。しかし、タイギャーは状態程度にも関わることができ、おおよその意のタイガイと区別した。タイギャーは土地言葉、タイガイは共通語といった文体的意義特徴の上でも違いが見られる。両者は、入ってきた時期を異にしているものと思われる。

(注10) 志津田藤四朗『佐賀の方言』中巻 (1971) に、「共通語でなら『ラッシ(萬次)ガナイ』『シマリ(締)ガナイ』『規律ニヨラナイ』などの意に相当する佐賀方言には『ホーラツカ』という表現がある。(後略)」(400頁) と見える。

(注11) 喚情的意義特徴に於いて、マイナスの方向の意味を表している点では共通している。

(注12) 『梅光方言研究第6号 福岡県域言語地図』(1988 梅光女学院大学方言研究会)所載の「43 五体の意味」の地図を見ると、福岡県内に於いても、地点によって「体全体」「胴から上」「腰」「背中」と、意味の地域性が存していることが分る。

付記

本稿は、昭和63年度広島大学国語国文学会秋季研究集会に於いて、口頭発表したものに補訂を加えたものである。席上御助言いただいた先生方、調査にご協力して下さった土地の皆様に記して御礼申し上げます。また、大橋勝男先生の御論攷 (注1) には、多くの貴重な示唆を受けた。室山敏昭先生には終始懇切なご指導を賜わった。心よりの感謝を捧げ申し上げます。